

---

# エンジェルリバーズ？

毒りんご

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エンジェルリバーズ？

### 【Nコード】

N9931K

### 【作者名】

毒りんご

### 【あらすじ】

神谷雅人はおんなじクラスの女の子、青柳美夜に恋をした。ところが、その好きな女の子が目の前で崖に落ちてしまった。雅人はあわてて崖をおり美夜にかけよるが、美夜は死んでいた。そんなときに雅人の前に一人の天使が現れた。天使は雅人に言う。「エンジェルリバーズ？」そう。雅人が恋をしたときすでに物語は始まっていた…… 天使と悪魔、ソシテ人間の戦いが今幕を開ける……！

## プロローグ1

神谷雅人十五歳。中高一貫校のため3年生といっても受験をしないので、のびのびとゆっくりスクールライフを楽しんでる、そんなくだらない俺が初めて恋をしたのは一週間前のことだった。

初めて話をしたのは、一週間前。そう 親父とお袋の葬式の、一日後のことだった。

父親と母親の口癖はいつも「優しくなりなさい。優しくなればいつか幸せが訪れる」だった。ソシテその言葉に俺は何の疑問も、思わなかった。理由？それは親父に、俺の会社がほとんど潰れてしまい借金がたくさん出来て、いきていけない。経営権などは全てお前にやる。だから借金の名義をお前に変えてくれと 馬鹿みたいな事を話した奴が居た。

2

そいつは同じ事をいろんな人に言い、そして断られ、あまり仲が良くい訳でもない親父に藁をもすがるような気持ちでやってきたそうだ。

普通なら断る。今の俺にだってそういわれたら断るだろう。

だが親父は、俺が知ってる普通以上の馬鹿だったようでソレを快く引き受けた。

そのおかげで2週間程度家族は苦しい貧乏生活を強いられた。でもその後は不思議とほとんど会社の業績が大きくなり、小さな会社にもかかわらず借金を1ヶ月で全て返済。そしてそのあとの一ヶ

月で本社を都心際のビルに替え、どんどん支店が出来、いつのまにかセカイ有数の資産家になってしまった。そんなことがあったからだ。

子供の頃、何故親父は普通のサラリーマンだったのにこんな金持ちになれたんだと聞いたら、あの時に縋ってきた人を見捨てなかったからだよ。優しくしたから神様が父さんに幸せを運んでくださったんだよ。と言われた。若干、そんなはずねえだろうが。世の中ぎぶあんどていくなんだよ。馬鹿にしてんのか？子供だからって騙せるとも思ってるのか？とか子供のくせにすこし思ったりもしたが、まあ結果がそうなっていたので俺はソレを信じることにした。

だが、そんな馬鹿親父も馬鹿お袋も莫大な遺産と俺を残して 交通事故とかいのであっけなくいっちまった。

まあ、当然そんな悪い口たたいても結局は家族を愛してたわけであつて。少しは泣いたりもした。葬式の翌日は学校だった。行きたくもなかったけどまあ行くのが義務らしいのでしょうがなく行った。

学校には行ったもののやつぱり、授業を受けるような気分ではなく。サボることにした。昼寝に丁度いい場所はないかと探していたら高学年校舎の芝生が生えている庭園に隅の方にいい場所があったので、ソコで俺はねころぶことにした。ゆるくねっころがって空を眺めたのだが。空が見えていたはずの俺の視界は急に曇った。いや曇ったって言うよりは長い黒髪をストレートにたらしめている同じクラス割と男子にもてている青柳美夜が不思議そうな顔をして、俺の顔

を覗き込んでいた。

しばらく無視していたのだが、サスガに少し鬱陶しくなって話しかけた。

「なんか、用か？」

すると美夜はにかつと笑って俺の横に座った。

「いや、特に用はないけどさ。なんか辛そうな顔してるな」と思  
つて」

「……………」

風が俺たちを吹き上げる。雲が流れるように動く。木がざわざわと音を立てて、木の葉を散らせる。

「別に、辛いわけでもない。苦しいわけでもない。悲しいわけでもないんだ。ただ。なんていえばわかんねえな」

雅人ははつと笑った。自分がわからなくなって。なにがしたいのかがわからなくなって

すると美夜はすこし眉間にしわをよせて手を俺の顔に伸ばしてきた。俺の両頬をつかんでいる。

「……………青柳。何がしたいんだお前……？」

「笑つてよ」

「ちつ……………」

いまさらながら俺はなんで、あんなこといつちやっただらーな！と思う。少し恥ずかしくなる。

「何でそんなに俺に笑えつて言うんだよ。俺のこと何にも知らないくせにうるせえんだよ!!」

美夜は、少し悲しそうな瞳をちらつかせてそつと俺の頬を掴んだ手を離れた。 やつとかと思いい俺はあとためいきをついた。 確かに美夜は俺の頬から手を離れた。 でもその代わりに、

美夜は俺に抱きついてきた。

「ちよまでおまえってほげやああってやめってなににながあつたのふあああ!？」

俺はわけが判らなくなり日本語じゃないような言葉もたくさん叫んだ気がする。 そりやだつてまあ。 可愛い女の子が抱きついてきたら学生男子はな。 わかるだろ？

『……………わかんないかな』

「……………!」

美夜は俺に抱きついたまま話す。

「神谷君には笑つてて欲しいんだよ…………… お願いだから。 もう二度と私の前で辛そうな顔しないで……………」

美夜はとにかく泣きそうな声になる。 なぜ美夜が苦しそうに話しているのかはそのときの俺にはわからなかった。 でもまあ。 肩が明らかに美夜の雫で濡れてきたのがわかったのでとにかく俺は笑うことにした。 状況的にはとても笑えたもんじゃなかったけどな。

「笑うから。 辛そうな顔なんてしねえから。 泣くな な？」

俺は美夜の肩を掴んで抱きつかれてた状況を脱会した。

「……………笑えよ……………」

美夜は袖で眼をぬぐうと、潤んだ眼をこっちに向けてきて小さな声で言った。

俺は少し照れながらも笑ってやったよ。優しいからな。俺の笑顔を見た美夜ニッコリと笑った。

『やっぱり。神谷君はそっちのがかっこいいよ』

そのときにはもう多分

惚れてたと思う。女は共感できないかもしれんが男はほら。わかるだろ？

まあ 惚れたのはこんなくだらない理由だったとおもう。

## プロローグ1（後書き）

うーん いろいろ失敗した（\* - こ）



## 01 焦りとか。

『であるからして、ここのxは……』

とある15歳の秋の日。窓際の一番後ろの席の男子生徒。少し艶めいてる黒髪に若干生氣のない茶色の眼。カツコイイ!というわけでもないが普通というわけでもない。まあまあ整っている顔立ち。

神谷雅人は授業には耳を傾けず。窓側に顔をかたむけていた。なにもかもめんどくさそうな顔をして雲を見ている。

それを明らかに人間ではないような、モノ、が空から見ていた。

紫色のツインテールをした長い髪と黒いやわらかそうなワンピースが風にゆれる。

その背には明らかに人間ではないと物語る白い翼。

濃い紫色をした吸い込まれそうな瞳はキラリと光った。

「次の仕事はここ……かあ」

、モノ、 はにやりと笑う

「さてさてさて、はたしてあの人は、生き残ることが出来るかな？」

するとものは しゅっと言う音ともに 消えた。

俺は暇そうに（マア暇だった）先生のやる気のない授業の声を聞くことはせず

ただぼーっと窓の外を眺めていた。

秋だっていうのに。学生が一番楽しみにしている行事学園祭も明後日に始まるというのに。

やけに寒いのは何故だ。きれてもいいかな。ねえ。いいかな？

雲行きは怪しくて、今日の夕方には雨が降るとかいつも朝になると別に意識してるわけでもないのに

TVを付けると見てしまふ番組のお天気お姉さんが言ってた気がする。

授業をうけるのもめんどくせえ。超ダツシユで家帰りてえ。しかも帰りにはめんどくさいわけのわからない学園祭のクラスの出し物に無理やり付き合わされることに昨日決まっちゃったし。うちのクラスの出し物は喫茶店。ベタすぎねえ？とか思いつつため息をついてみるがまあそのため息には何の意味もないことなのでもう先生に気づかれなくダツシユで家に帰る方法を考えていた。

『神谷！』

「はいつ!？」

何故呼ばれたかも気づかず

ビククリして雅人はいすから飛び上がった。

周りを見渡すとクスクス笑ってこっちを見ているクラスメイト。

「お前、授業をしつかり受けないと進級できねえぞ？　じゃあそんなところでこの問題といてみる！」

「 $x \parallel 2$  乗  $(y - 4)$ 」

雅人は即答した。

すると少しクラスがどよめく。　やべ。やっちまった。

額から汗がにじむ。

もともと雅人はものすごく頭がよかった。そこらの有名進学校にトップで入学した！というのとはレベルが違う。　問題は全て一瞬見ただけで解いてしまう。　何かの設計図を書いて欲しいといわれたらその何か、を聞いてしまえば一寸の狂いもなく書き上げる。

雅人は八歳のころにソレを国が発覚して、研究所みたいなのに連れて行かれて外国の一流大学の入試試験をうけさせたら　計算モノであつたら全て満点になった。

まあソレはいい事なのだが、ほかのクラスメイトとかに知られてしまふのはあまり良くない。

というか嬉しくない。自分が人離れしている奴だと思われなくなかったから。

だからテスト問題とかはほどほどに間違えている。

だが今はあせって問題をすらすらと答えてしまった。

「　おお・・・あつてるが、授業はちゃんと・・・聞けよ？」

先生の額にも汗がにじむ。

「じゃあ座れ・・・」

やっちまったよーと心の中で雅人は叫びながら座る。

すると横の席の、青柳美夜が話しかけてきた。

青柳美夜は割りとクラスでもてている可愛い子で、長い黒髪をストレートにたらしっていて風が吹くたびすこし髪がゆれるのだがそれがまた可愛い。

眼も綺麗な黒で顔立ちはそのらへんのモデルに負けないくらい可愛い。スタイルもバツグンだ。そんな美人が雅人に話しかけてきた。

「神谷くん すごっ 私あんな問題一生かかっても解けない気がする 今度勉強教えてよっ」

美夜は煌いた眼で微笑んでくる

雅人はもちろんまんざらでもない表情をして照れくさそうに笑った  
「ああ。．．．いいぜ。そのかわり今度、俺買いたいものがあるんだが青柳、それに一緒「そーいえばさあっ 学園祭の準備おわってないからさっ今日はサボらないでね神谷君っ！ってどうしたの？そんな落ち込んでるような顔して」

「いや。．．．いいよ。うん。今日はサボらない」

若干なみだ目になりながら雅人はつぶやく。俺、乙。

つてか、サボってたこと気づかれてたんだな。めんどくさいけど美夜のためだっ

「．．．．．まてよ。文化祭の準備が終わってないなら材料とか買い終わってないって事だよな．．．．．？」

つまりなんだ。二人で買出しとか行けちゃうんじゃないか 行けちゃうんじゃないか？

「うおっしや！感謝するぜ学園祭っ」

ついつい口に出して大声でいってしまう。

「感謝して、やる気を出すのはいいい加減授業を聞きやがれ神谷！」

先生がこっちに眉間にしわを寄せた状態で笑ってこっちに歩いてくる。

ええ〜

「先生、暴力反対です！」

「じゃあ俺の話をいい加減聞きやがれ！」

がつっ

頭をグーで殴られた。

クラスが笑い声で包まれる。

頭は痛かったけど雅人は少ししあわせだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9931k/>

---

エンジェルリバーズ？

2010年10月9日03時53分発行